
バカとテストと召喚獣 現に見る白昼夢

赫鎌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 現に見る白昼夢

【Nコード】

N9636R

【作者名】

赫鎌

【あらすじ】

バカテスト二次創作です。不定期更新になります。

第一話 Aクラス（前書き）

本命で執筆している遊戯王が詰まったので気分転換に書いてしまった。AVSFが終わるまでは毎日予約更新。以降は不定期更新。

第一話 Aクラス

「……………これはまた」

どこの高級ホテルだと言わんばかりの絢爛さだった。

重厚そうな見た目に反して軽く引ける扉を過ぎると、最初に踏みしめたのは赤い絨毯。靴越しにも分かるその感触は、ライオンのたてがみの如く柔らかい。

数歩進めば個人の机となるシステムデスク。その横には個人エアコンに個人冷蔵庫が付いており、席に着く為の椅子はリクライニングシート。合成ではない本物の皮革に、身体が少し埋まる程の低反発クッションを内蔵。さらに極めつけは、最新の型のノートパソコンだ。

机から目を離し、奥を見れば備え付けのドリンクサーバーが何種類も置かれている。その隣には各種菓子類が並んでおり、休み時間には優雅なティータイムが開かれるだろう。

視線をずらし正面を見れば大きな黒板、と思いきや巨大なモニターが張られていた。光沢のある画面からはそれぞれの席順が表示されている。

「……………」

急に不安になり、一旦廊下へ出る。そして扉の上に書かれている文字を注視。

『2 - A』

紛れも無く、文月学園二年A組の教室だった。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします」

髪を後ろでお団子上にまとめ、スーツをビシッと決めた眼鏡の先生が話を始めた。

ここ文月学園は試験校である。進級する際『振り分け試験』と呼ばれる試験を行い、その成績順にクラスが割り振られていく。具体的には一番下はF、そこからE、D、Cと上がっていき、一番上に位置するのがAクラスとなる。

一クラスの生徒数は五十人。つまり、ここAクラスにいる五十人は、二年生の中でも高い学績を誇る精鋭たちと言える。

「まずは設備の確認をします。不備のある方は自己申告してください」

教室の設備も、クラスごとによって違う。先に述べたように、この高級ホテルだと言わんばかりの設備を保有しているのがAクラス。Bクラスからは段々とグレードが下がっていき、Cクラスが一般的な高校の設備、D・Eクラスは少し貧しい高校の設備程度になり、Fクラスは廃屋のような設備になるらしい。

「でははじめに、クラス代表を紹介します。霧島さん、前へきてください」

担任、高橋女史に呼ばれ、一人の女子生徒が教壇へと上がる。

クラス代表と呼ばれる者は、そのクラスで最も成績の高い者を示す言葉であり、Aクラスの代表と言う事は学年最高成績保持者であることを意味する。

「……霧島翔子です。よろしく願いします」

澄んだ声で囁かれたのは短い言葉。しかし、それが教室によく響いた。

クラス中の視線を浴びる中、淡々と挨拶をこなすのは難しいが、彼女の立ち振る舞いは堂々としたものだった。

しかしその視線はどこか、女子生徒にしか向けられていないようにも見える。

「……っ」

数瞬、目があった。その時の彼女はとても驚いた顔をしていたが、すぐに視線を外され、それ以上窺う事は出来なかった。

「Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にし協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」

そう高橋女史が言うと、霧島代表は軽く会釈をして自分の席へと戻った。

席に戻る直前、誰かが廊下を走っていく音が聞こえた。それが何故か、波乱の始まりの鐘に思えた。

第一話 Aクラス（後書き）

息抜き程度なので短いです。

第二話 クラスメイト（前書き）

Aクラス内部はイメージです。

第二話 クラスメイト

適当に自己紹介が終わった後の一時間目は、オリエンテーションとなった。新学期早々授業というのも味気ない、という学校側の配慮だとか。

「それにしてもAクラスは広いね」

「ん。初めて見た時は度肝を抜かれたよ」

今話しているのは、今年から同じクラスになった久保利光。俺と同じで眼鏡を掛けている。

久保の成績は霧島代表に続いて高いらしく、学年次席らしい。俺には関係ないことだが。

俺達は早速冷蔵庫を開け、中にあった飲み物を傾けつつティータムとしている。ちなみに俺は緑茶、久保は紅茶である。

「やつほー 久保君に深間君だったかな？」

快活そうな挨拶が、隣から聞こえてきた。見れば髪を短く切った、ボーイッシュな女子生徒が来ていた。

「ああ。工藤さんだったかな？」

「そだよ久保君。工藤愛子、十六歳。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79。好物はシュークリームだよ」

「

「ブツッ」

思わず噴出しそうになった。

「おやおや？ 深間君も男の子だね 僕の起伏の少ない身体に興奮しちゃったのかな？」

「自己紹介でスリーサイズを話す女との対話マニュアルは持ちえていないって……」

この色々と規格外な女子、工藤は一年学年末からの転校生らしい。だから印象付ける為にこんな自己紹介をしているのだとか。

……全体の自己紹介でも、得意科目は保健体育（実技）と言っていた位規格外だ。確かにインパクトは大きいだろう。主に男子にとっては。

「愛子。変なこと言ってんじゃないわよ」

「あれ、優子。代表はどうしたの？」

「高橋先生に呼ばれて行ったわ」

髪を短く切り揃えた、強気なこの女子は木下優子。学年でトップレベルの実力者らしい。去年からの話を聞く限り、学校規模で見ても優等生だという。

「ところで深間君、だったわね？」

「ん、ああ。そうだけど」

「……あなた、代表とどんな仲なの？」

木下がそう言った途端、他の二人の視線、及びその他大勢の視線が俺に向いた。

「……あー、と、何でそんなことを？」

「私ね、名簿順の関係で代表の隣の席なのよ」

だから、と続ける木下。

「代表がクラスの自己紹介の最中、ずっとあなたの事を見てたのよ」
「！」

『『『キヤーツ！！』『』』』

話を聞いていたらしい女子達が、色めきだした。反対に男子からは何やら怨念の籠った視線が向けられ始めた。

「代表と深間君がまさかそんな仲！？ いやーやるねえ」

「深間。まさか本当なのかい？」

問い詰めてくる工藤に久保。待ってくれ。どうして俺が彼女とそんな仲だという事前提で話が進んでいるんだ。

「で、どうなの深間君」

何やらキラキラとした笑みを浮かべる木下。

……まあ、違うんだって。

「俺は……霧島とはただの幼馴染だよ」

「「「幼馴染?」」」

「そ。幼馴染」

三人仲良く唱和するのは結構だが、どうしてそんなに意外そうな顔をするんだろうか。

「んー……でもほんて『ダアアーリーーン!!』……何今の?」

木下の言葉は、遙か遠くFクラス辺りから響いてきた野太い野郎の大合唱によって掻き消された。

「ま、まあなんにせよ、俺と霧島はただの幼馴染なだけだよ」

『そ、そうだよな! なんとってあの霧島翔子だもんな!』

『なあんだツマンナイ』

『と言う事は……俺にもチャンスが!』

俺の『幼馴染』発言で、それぞれ思い思いの場所へ戻っていく。興味が無くなった以上、ここに留まる意味も薄いのだろう。

「ふうん……まあ貴方がそういうならそうなのかしら。邪魔して」
めんなさいね」

「いや、別に構わないよ」

「えー？ ボクはまだ聞きたいかな」

「愛子、戻るわよ」

まだ聞き足りないらしい工藤を引つ張って、木下は女子のグルー
プの中へ入っていった。残されたのは俺と久保だけだが、俺も席を
立つ。

「ちょっとトイレ行ってくる。飲みすぎたようだ」

「ああ」

久保に一言断ってから、俺はさながら逃げるかのように教室を出
た。

途中どこからか『大ありじゃあっ！！』という魂の叫びのような
ものを聞いたが、無視した。

第二話 クラスメイト（後書き）

途中と最後の叫びはいうまでも無くFクラスです。

第三話 鏡の中（前書き）

なほに短いです。

第三話 鏡の中

「……………」

トイレに来ていた俺は、入ってすぐ鏡の前でにらみ合っていた。映るのは、相変わらず冴えない面構え。伸びすぎて目元が少し隠れる黒い前髪。その目元をさらに隠す黒縁の眼鏡。

おもむろに眼鏡を外し、髪を水で濡らした手で掻き揚げ、オールバックと呼ばれる髪形にする。

もう一度、鏡を見る。

そこには先程の冴えない面構えとは違い、額に大きな横一文字の傷が刻まれていた。

『よう俺。えらく疲れた面してるな』

鏡の中のオレが、話しかけたような気がした。

幻聴とも、空耳とも言えるが、俺には目の前の存在が自分の中に眠るもう一人のオレのような気がして、敢えて対話をした。

「そこまで疲れることをした覚えは、ないんだけどな」

『いいやオレには分かる』

この対話を始めたのは、小学校五年生あたりからだった。誰にも言っていない、俺達だけの秘密だった。

「………… オレとはそれなりな付き合いになるけど、相変わらずお前がわからないな」

『わからない？ そんなはずないだろ？』

昔から変わらない様子で、オレは答えた。

『オレはお前で、お前はオレだ。自分のことが分からないなんて、ありはしないだろ？』

「……そういうものか？」

自分のことは自分が一番知っている、とはよく言ったものである。オレの話が本当なら、目の前のオレは俺《、》《》のことを何でも知っているということになる。

……いや、そんなのは些細なことか。

「俺は戻るよ。また後で『騙されたアアアアア！！』……なんだ？」

戻ろうとした途端、廊下から大声が響いた。ちなみにこのトイレは旧校舎と新校舎の丁度真ん中の位置にある。そして聞こえたのはよく知っている人の声。

『絶対逃がすな！ 無謀にもDクラスに宣戦布告しに来たFクラスは徹底的に潰すんだ！』

『中野そつちに逃げたぞ！ 鈴木と挟み撃ちにしろ！』

『笹島は先回りして吉井の退路を封じる！』

『チイイ、雄二の奴！ 僕が馬鹿だと思ってこんな仕打ちをしたのか！』

……。

「俺、疲れてんのかな……」

『……まあ、相談なら乗るぜ』

思いのほか面倒見の良さそうな鏡の中のオレ。
何だかんだ言っても、長い付き合いである。

第三話 鏡の中（後書き）

今更ですがこれは全て予約投稿なので、次話を掲載する前に感想の返信などができません。ご了承ください。

第四話 戦争とは（前書き）

戦争の説明です。

第四話 戦争とは

「やおお帰り……どうしたんだい深間。随分疲れた顔をしているけど」

「……いや、何でもないさ……」

髪型を直して教室に戻るなり、久保に心配されたがどうということはない。

それにしても、と先程の叫びを思い返す。

(DクラスにFクラスが宣戦布告、か……。新学期早々始めるとは、それだけ自信があるのか……。いや、なんらかの弱みでも握っているのか？ だがそれでも実力の差は殆ど埋まらない。となるとFクラスにはDクラスの代表を圧倒できる戦力があるということになる。それに逃げ回っている吉井の言っていた『雄二』……。もし考えている通りのことが起きているなら、恐らくは……)

「深間。難しい顔しているけど、どうしたんだい？」

「……なあ久保。去年成績上位だった生徒の中で、今年Aクラスに入っていない生徒っていたか？」

オレの予想が正しければ、ここAクラスの生徒達に匹敵する実力者が、Fクラスに入ったはずだ。

「……僕には覚えは無いが、Bクラスの友人が話していたな」

久保は僅かに考えると、思い出したように言った。

「去年学年二位だった姫路瑞希さん。彼女は振り分け試験で、途中退席したそうだよ」

あれから数時間経ち、今は午後の授業中。といっても、先生はいない。

FクラスとDクラスの試験召喚戦争、通称『試召戦争』と呼ばれるものが行われ、教師はその戦争にかり出されている。

ここで試召について少し説明したいと思う。

試験召喚戦争とは、学年のクラス間で行われる、クラス設備競争戦のことである。文月学園では設備がクラス毎に極端に違うため、それに不満を持つ生徒は当然出てくる。そこでその不満を解消する為に考案されたのが、科学とオカルトと偶然によって生まれた試験召喚システムだ。

このシステムは生徒一人一人が『召喚獣』と呼ばれる存在を一体持ち、個々で競わせるものである。この召喚獣は、最も新しく受けたテストの点数がそのまま力として割り当てられる。この特徴を最大限に発揮させるため、この学園の試験時間には制限がない。これが俗に言われる、『無制限テスト』というものだ。制限時間がないものだから、解けば解くほど召喚獣の力が上がり強くなる。逆に解けなければ、召喚獣の装備が『ひのきのぼう』と『おなべのフタ』なんていう貧弱なものにもなりかねない。

これらが試験的に実用されたのは、生徒達の勉学に対するモチベーションを高めようという学園の狙いがあったからだというが、詳しい事は定かではない。

話が逸れたが、試験召喚戦争ではこの召喚獣を用いた戦いが行われる。教師の立会いの下、テストを受けた十科目の中から一つ選ば

れ、召喚フィールドを展開。フィールド内に召喚獣を召喚し、その中で戦わせる。この戦いは俗に言う格ゲー的なもので、点数が高いから勝つというわけではなく、召喚主の操作技術によっても左右される。極端な例を言ってしまうえば、操作下手なAクラスと戦上手なFクラスが戦えば、どちらが勝つかわからない。

そしてこの戦争で勝敗を決める方法が、クラス代表を討伐すること。Aクラスの場合で例えると、霧島代表が討ち取られた時点でAクラスの負け。逆に相手のクラス代表を討ち取れば、Aクラスの勝ちだ。

そして勝ったほうのクラスは、クラス設備を交換できる権利を得る。これにより、クラス設備に不満のある生徒は戦争を起こし、上位のクラス設備強奪に熱意を上げる、というわけだ。

私利私欲の為に勉強する、というのは間違っていると思わなくも無いが、結果的に生徒の成績が上がり学園全体の成績も上がるのでいいらしい。

そして話は冒頭へ戻り、現在FクラスはDクラスの設備を奪うため、戦争を起こしている、というわけである。

ピンポンパンポーン

《船越先生、船越先生》

連絡用の放送が入る。

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

この瞬間、Aクラスの時、確かに止まった。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

念のため弁明しておく、これはあくまで生徒達の間で起る、ゲームのようなものである。決して本物の戦争ではないので、自らを犠牲にするようなことをせずともいいのである。

「……ねえ。深間君」

近くで自習のプリントをしていた工藤が話しかけてきた。

「吉井君って……熟女派？」

「……俺が聞きたい」

「吉井君が……まさか、いや吉井君に限ってそんなことは……」

「久保。まずは落ち着いて素数でも数えろ」

この世の終わりのような顔をする久保をなだめる。

『須川アアアアアアアッ！！』

突如として響いた吉井の声は、まさしく魂の叫びそのものだったとここに記しておこう。

第四話 戦争とは（後書き）

Fクラスでは戦争真っ只中です。

第四・五話 幼馴染（前書き）

主人公の名前、よつやく判明。

第四・五話 幼馴染

放課後、DクラスとFクラスの戦争は予想通りFクラスの勝利で終わった。詳しい事はわからないが、明日にでも設備の交換が行われるだろう。

「……………待って」

もうこれ以上ここに理由も無いので帰ろうとすると、不意に後ろから声をかけられた。

独特の間を空けて、鈴を転がしたような声。

「どうしたんだ？ 霧島」

霧島翔子が、そこに帰り支度を済ませて立っていた。

NO SIDE

「……………今日の戦争、Fクラスが勝った」

「ああ。そうみたいだな」

学校を出て暫く、二人は黙ったまま歩いていた。そんな中、話を切り出したのは霧島翔子だった。

「……………竜希は」

「ん？」

「……竜希は、Fクラスが勝つて分かった」

問うようにはなく、ある種の確信を持って告げられる。

「……………どうして、そう思った？」

その言葉にこれといった反応を見せるでもなく、僅かに浮かべた微笑を維持したまま聞く。

「……………顔を見てれば分かる」

「ふう、ん……………」

「……………どうして、分かったの？」

深間竜希の反応に怪訝な顔をするものの、それ以上に聞きたい事を聞いた。

「簡単だよ。Fクラスはあいつが代表なんだ。負けるはずが無い」

「……………そう」

それだけ言って、二人は再び黙った。既に陽は傾き、長い長い影が、暖色に染まったアスファルトに黒く映った。やがて二人は黙ったまま、曲がり角に着く。

「じゃあ俺はこっちだから。じゃあな霧島」

「……うん。また明日」

そう言って、二人は互いに逆の方向へ歩き出した。前に出ていた長い影は、寄り添うように二人の傍を歩いていた。

「……最後まで、名前で呼んでくれなかった」

別れてから、霧島翔子はふと
呟いた。

その様子は親しい友人を無くした子供のようで、瞳には悲しみの色
が表れていた。

第四・五話 幼馴染（後書き）

幼馴染の下校風景でした。

第五話 吉井明久（前書き）

今更原作主人公登場。

第五話 吉井明久

新学期二日目。この日は朝から騒々しかった。

竜希が少々遅い登校をしながらAクラスへ向かう途中、Fクラスの方から誰かが校則ガン無視で走ってきた。壁に貼られた『廊下は歩きましょう』とツインテールの電腦歌姫がネギを振り回しながら叫んでいるポスターが目に入らないのだろうか。走ってきた人物は竜希の存在を確認すると同時に、

「匿ってください!!」

何故か土下座した。

この瞬間、竜希の思考回路にはフリーズ、もしくは不正な処理によるエラーが発生した。

正気に戻るのにそれほど時間はかからなかったが、目の前の人物を確認すると、竜希は溜息をついた。

「……吉井。まずは落ち着いて西村先生のところへ行こう」

「やめて!?! 鉄人のとこなんかに行ったら有無を言わず放課後まで補習と言う名のハートフルコミュニケーションだよ!?!」

目の前のバカ 失礼、吉井明久にとって、西村先生は天敵である。なぜかと言われれば自業自得としか言えないが。

しかし竜希は、お前は補習させられるようなことをやらかしたのか、とか鉄人なんて呼んでるのか、とかいう驚きを遥か斜め上に超越した驚きをしていた。

「よ、吉井……お前……!」

「へ？」

その内容とは。

「お前……、Heartful Communicationなんていう英語、知ってたのか!？」

「そこで驚かれるとは思って無かったよ畜生！」

この男、吉井明久をとんでもないバカだと言う目で見ているため、僅かでも高度（と取れるよう）な言葉を使つと、大層驚くのである。

「いや待て俺。吉井がこんな言葉を知っているはず……」

「なんだろう。深間君の中での僕の評価が凄く気になるんだけど……」

付け加えさせて貰うと、この吉井明久と呼ばれる男はFクラス在籍で、学園始まって以来のバカで問題児という意味の称号の『観察処分者』を有している。つまり、学園一のバカである。

「なあ吉井」

「え？」

「GPSの元の言葉は？」

「ガツと掴んでパツと放してシュート」

「よかった。本物だ」

どうしてこんな長嶋語のような回答で判別できるんだろうか。そしてGPSでここまで機械とかけ離れた答えが出るのはどうしてだろうか。

「ところであんなに慌ててどうしたんだ？」

「へ？ …… ああああそうだった！！」

今まで忘れていたのか、突然うるたえ始める吉井。竜希は不思議そうに見ているが、その狼狽振りには端から見ても凄まじいものである。まるで今にもやかんと枕を持って椅子の上で踊りだしそうなくらい。

「一時間目の数学のテスト、監督が船越先生なんだよ！！」

船越先生。四十六歳 独身。婚期を逃し単位を盾に生徒と交際を迫ろうとするほど身の危険を（主に男子生徒が）感じる文月学園の数学教師。

そして昨日吉井明久の名前で体育館裏に（須川によって勝手に）呼び出された教師でもある。

「……………吉井」

うるたえる吉井の肩にそっと手を置き、男なのにまるで聖母の如く微笑みを浮かべて呟いた。

「子供は卒業してからだぞ？」

「みんな嫌いだー！ー！！」

その一言で吉井は走り去っていった。腕で押さえた目元からは水が迸っていた。

からかい過ぎたか、と思った竜希だったが、まあ吉井なら上手くやるか、と思い直し、今日も良いことあるかなと考えながらAクラスへと歩を進めるのであった。

なお吉井は船越先生に近所のお兄さん（三十九歳独身）を紹介するということに難を逃れたという。

第五話 吉井明久（後書き）

やっぱり短いです。

第六話 嵐の前（前書き）

普通の授業風景。

第六話 嵐の前

「……つまりこの a_1 を $F(x)$ に代入して微分すると $F'(x)$
 $\parallel 4x + 3$ となり、必要条件として成り立つ。反対に」

数学の授業。午前中でも戦争を仕掛けていないため、普通に授業は進む。といっても、後数分で終わるが。

「となり十分条件も満たす。よってこの関係は必要十分条件を満たしているということになり……む、時間か。では次回はこの続きをする。一同、礼」

『『『ありがとうございますー』』』

数学を担当した教師は次の授業の準備のため職員室へと戻っていく。そして教室中は生徒達の話し声が充満する。年頃の少年少女なら当然の如く、授業が終われば友達とおしゃべりしたいものだ。

「深間。知っているかい？」

「どうしたんだ久保」

何をするでもなくボーっとしていた竜希の所へ、久保が話を持ってきた。

「Fクラス、折角勝ったのに設備交換をしなかったらしい」

「……は？」

「しかも今度はBクラスに宣戦布告したという話も聞いた」

「……………」

いや、予想できなかったことでもない、と竜希は思った。

Fクラスなら、あの代表なら考えそうな事だと。

(Dクラスと戦争をして設備好感をせずにBクラス？ ということは目的はDクラスの設備では無く他のもの。Dとの直後にBを攻めるということはそれに利のある何か…………)

「久保。何か、校舎案内かなにか無いか？ 教室の配置が知りたいんだが」

「見取り図でいいなら、生徒手帳の最後の方に乗ってたな」

懐から生徒手帳を出し、該当ページを開きながら差し出してくれる。

そのページを見ながら、竜希は再び考えた。

(制圧したDと攻めるBは隣同士か…………。確かBの設備はAの一つ下、それなりのものが揃っていたはずだ。となると予想される設備は高さ調整可能な椅子と机、モニターディスプレイ、エアコンくらい…………。そしてDクラス…………。確かDクラスには、スペースの関係で間借りしているBクラスの室外機があったはずだ。Dを制圧してBに攻めるとなると、当然この存在は無視できない。となると、アイツの性格から予測される手段は エアコンの損傷故の窓開放、そこからの奇襲、か?)

そこまで考え、馬鹿げると竜希は思った。

今予想したのは、全てある程度の運も必要とされる作戦だ。まずDクラスがBクラスの室外機を破壊する。これは設備の交換を避ける代わりにやれ、とでも言えば実行されるだろう。しかし実行すれば当然教師に目を付けられる事となる。それに怯み壊すタイミングがずれる、もしくは壊されなかつたら作戦はお釈迦だ。

さらに奇襲にしても、仮にもBクラスの代表を討伐できるレベルの実力者がいなければ実行できない。さらに代表周りには近衛部隊が何かがついているのが普通。側近のBクラス生徒に邪魔をされれば当然失敗で、その部隊を討伐するのにも相応の者がいなければならぬ。

そんな実力者が上手い具合にFクラスに揃うはずもないし、気温を気にせずに窓を閉められたままにされてもアウト。中々運の要素が強い博打だ。

(…………けど)

あいつならやりかねない、とも思う。

不可能なことを色々と可能にしてきた、かつて神童とまで呼ばれたあいつなら、何とかする。不思議と、そんな気もした。

第六話 嵐の前（後書き）

さてBクラス戦です。ということとは、あのクラスもきます。

第七話 Cクラス(前書き)

ちょっとだけ長いです。

第七話 Cクラス

「我々Cクラスは、Aクラスに宣戦布告します！」

突然の怒号で始まった朝。Aクラスの面々は困惑していた。

FクラスとBクラスの戦争は四時までには決着が付かなければ明日に持ち越し、という不可侵条約の下一旦終戦した。

そしてその後日、つまりは今日。CクラスがAクラスに戦争の意思表明を表しに来た。

「木下優子！ よくも私達を豚扱いしてくれたわね！ あんた達絶対Fクラス送りにしてやるわ！」

何故か木下優子を名指しで。

言うだけ言うと言戦布告に来たCクラス代表小山友香は音を立て扉を閉め、これまた音を立てながらズカズカとCクラスの教室へと戻って行った。

後に残されたのは、

「……優子、何したの？」

「ち、違うのよ代表！ アタシは何もしてないわ！？」

「優子……流石に豚扱いは酷いと思うんだけど……」

「あんなことを言われれば、相手が怒るのも無理ないだろうね……」

「だ、だから違うのよ愛子に久保君！ アタシじゃないんだって！」

！」

必死に弁明する木下優子と、そんな彼女に対して若干距離を置くクラスメイトだけだった。

「まあ……まずは落ち着こうかみんな」

パンパンと手を叩いて、全員の注目を集めるのは竜希だった。

「ひとまず木下が言った云々は置いといて、今はCクラスを打倒することだけを考えよう」

「だから言っていないんだって！」と叫ぶ木下を華麗にスルーした竜希は、霧島へと顔を向けた。

「それじゃあ景気付けに、代表に音頭を取ってもらっていいかな？」

代表、と言った僅かな瞬間、霧島が顔を伏せたが誰も気付かなかった。

顔を上げた霧島は、代表らしい顔つきをしながら教壇へと上がる。そして改めて教室中のクラスメイトを見渡すと、

「……AクラスはCクラスと試験召喚戦争をします。総員準備にあたってください」

試験召喚戦争の開始を、宣言した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-

「今何人目だった？」

「五人目。深間はとうだい？」

「四人。結構な数があるな」

宣言されたのは八時五十分頃だったにも関わらず、戦争は九時ジャストに始まった。

元々Cクラスは戦争の準備をしていたらしく準備万端で、対するAクラスは元々個々の力が強い事もあって特に準備を必要としなかった。

「くそっ！ 誰か応援を頼む！」

「ダメだっ、こっちもやばい……うわあっ！」

Cクラスの一人が、Aクラスの攻撃を受けて倒れる。

召喚獣に表示されている点数は0。これは即ち、この戦争において戦死したことを意味する。そして戦死した者は。

「戦死者は、補習うっうっ！！」

トライアスロンが趣味で体中が筋肉で出来ている言っても過言ではない生徒指導兼補習教師西村宗一教諭、通称鉄人の手によって、補習室という名の地獄へ送られる。

「て、鉄人！？ 嫌だ、補習室は嫌だああ！！」

「黙れ負け犬がっ！ 捕虜は全員この戦争が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんからな。たぷりとし

『ごいてやるぞー!!』

『ヒイイツ!? 頼む、見逃してくれ! あんな拷問耐えられる気がしないっ!!』

『拷問? そんなことはしない。これはあくまでも教育だ! 安心しろ、戦争が終わる頃には趣味が勉強、尊敬する人物は二宮金次郎という理想的な生徒に仕立て上げてやろう!』

『お、鬼だ! だ、誰か助け イヤアアツ (ボタン、ガチャ)』

「……………」

竜希と久保は、いたたまれない気持ちになった。しかしこれは戦争。前日の吉井ほどではないにしろ、犠牲は付きものなのである。

「遠山ああ!! 畜生……よくも遠山をつ!!」

重ねていうがこれは戦争である。が、死地へ赴いた戦友に対して血涙を流すような場所ではない。

「遠山の仇だ! Cクラス黒崎が召喚します! 試獣^{サモン}召喚!!」

黒崎を中心として足元に現れる幾何学模様の魔法陣。教師の立会いの下、システムが起動した証である。その中から、召喚獣が姿を現した。

黒崎の召喚獣はサーベルを持った西洋騎士のような格好をしており、背丈は八十センチほど。丁度召喚主をデフォルメしたような姿

をしていた。

「なら俺が。Aクラス深間が召喚します。試獣^{サモン}召喚！」

呼びかけに応え、竜希の召喚獣が姿を現す。

所々が金糸で刺繍された神父服を着ており、その手には本来の目的とは遠くかけ離れているであろう巨大な十字架^{ロザリオ}を肩に掛けるように持っていた。

二人の召喚獣が揃ったことで、互いの点数が表示される。

『Cクラス 黒崎トオル VS Aクラス 深間竜希
現代国語 117点 VS 288点』

「ば、倍以上の差だつてえ!？」

圧倒的な点数差の前に、思わず黒崎が怯む。その隙を見逃すほど、竜希は甘くなかった。

「そおりゃあつ!！」

掛け声と共に横薙ぎに大きく振られた十字架は黒崎の召喚獣を壁まで殴り飛ばした。当然その点数差に耐えられるはずも無く、一瞬で消滅する。

『Cクラス 黒崎トオル VS Aクラス 深間竜希
現代国語 0点 VS 288点』

「戦死者は補習!！」

点数が0となったことで戦死扱いとなった黒崎は、有無を言わさ

ぬ勢いで鉄人に担がれていった。

「くそっ！ Cクラス野口が召喚します！ 試獣召喚！！」

「次は僕がいく！ 試獣召喚！」

久保の召喚獣が勢いよく飛び出し、野口の召喚獣と一緒に召喚される。

『Cクラス 野口一心 VS Aクラス 久保利光
現代国語 113点 VS 323点 』

先程よりも圧倒的な点数差。約三倍の戦力差に、あいた口がふさがらない野口。

野口の召喚獣は先程の黒崎と同じサーベルと西洋鎧。ただし先程の鎧が金だったのに比べ、こちらは銀である。

対する久保の召喚獣は、なんと大きな鎌を持ってフードを被った死神風の様相。釜の大きさも召喚獣の大きさに不釣り合いなほど大きく、力強さを誇示している。

「やあっ！」

久保の掛け声と共に大きく奮われる大鎌。一瞬で相手の首を切り飛ばし、戦死にする。

再三「補習うううう！！」と叫びながら戦死者を連行する鉄人を尻目に、竜希はCクラスの教室内を見た。

既に人は数人とおらず、残っているのは代表である小山とその側近の近衛部隊二人のみ。

「木下優子！ 絶対私たちを豚呼ばわりしたことを後悔させてやる

わ！」

まだ根に持っていた。

「だから知らないっていいてるでしょ！？ 本当にアタシじゃないのよ！」

「嘘を言いなさい！ きっかり八時半、アンタが教室に入り込んで怒鳴り散らしたのを、Cクラス全員が目撃しているのよ！！」

今の話に、竜希は気になる言葉があった。

八時半。それはCクラスが戦争の宣戦布告にくる僅か二十分前。竜希の記憶が正しければ、その時木下優子は霧島翔子と仲良く談笑していたはずだ。

そのことに気が付いたのが、隣の久保も、そして当事者の木下もはっとした顔になる。

彼等は彼女の自己紹介で、去年からの噂で知っていた。木下優子には弟がいることを。そしてその弟が、演劇部のホープで声帯模写の名人であることも。

「……あんつの愚弟が……！」

肩を震わせ、怒りを堪える木下。謂れの無い罪を着せられたのだから、無理も無いだろう。

「アンタだけは私自らが倒してやるわ！ 試獣召喚！！」

「……帰ったら絶対お仕置きよ！ 試獣召喚！！」

『Cクラス 小山友香 VS Aクラス 木下優子』

英語W 168点 VS 384点

」

勝負は一瞬で着いた。

木下の召喚獣が突き出した大きな槍が、小山の召喚獣を一撃の下
吹き飛ばしたのだ。

戦争開始から、僅か十五分。

この時を以て、Aクラス対Cクラス戦はその幕を閉じた。

§ - - オマケ - - §

「……………!?! (ゾクッ)」

「? どうしたの秀吉?」

「い、いや……………。なにやら寒気がしての……………」

「おいおい。頼むから風邪なんて引かないでくれよ?」

「そうだよ。女の子なんだから暖かくして寝なくちゃだめだよ?」

「わしは男じゃー!」

第七話 Cクラス（後書き）

Cクラス撃破。次話は閲覧注意。

第八話 モザイク必須（前書き）

さて、閲覧注意ですよ。

第八話 モザイク必須

「お、俺達Bクラスは試召戦争の準備が出来ている！ Aクラス共、お前達の天下ももうすぐ終わりだ！」

今日は戦争日和だなあ……、と、竜希は空を見上げて軽く現実逃避していた。何故かと言われれば、目の前の存在の所為である。

「……根本。お前に何があっただんだ？」

「う、うるさい！ 俺だって好きでこんな格好をしているわけじゃ

……」

「大丈夫。俺は理解ある方だから、さ。学校に着てくるのはやめようぜ。な？」

「畜生！ 吉井に言い聞かせるように言うんじゃない！ あと何で俺の目を見て話さないんだよお！！」

目の前のBクラス代表根本恭二は、Aクラスに「試召戦争の準備が整っている」ということを宣言しに来ていた。

……何故か女装して。

着ているものは文月学園の女子生徒の制服で間違いない。但し、ミニだ。何がとは言わないが、膝上十七センチ、とだけ言っておこう。はつきり言って目の毒である。無論、悪い意味で。

当然健全な男子高校生には耐えられないわけ。

「よし根本。西村先生のところに行こう。あの人なら、ちゃんと話を聞いてくれるさ」

「人を精神的に痛い人のように扱うんじゃない？ あとちゃんと俺の目を見る！」

「その後は学園長のところだな。いや、その前に保健室か？」

「見るよう！？ 俺の目を見て話してくれよおお！？」

竜希は根本の顔を見ぬまま、勝手に話を進めていた。もちろん、現実逃避である。

そして哀れにも犠牲者が、もう一人。

「ちよつと深間君？ あんまり廊下の扉を開けっ放しに……は……」

木下優子。犠牲者第二号決定。

ちなみに根本が来ていることを知っている生徒は皆、我関せずを貫いている。気付かなかった木下優子は、この混沌とした空間に迷い込んでしまった。

「やあ木下か。丁度良かった、バトンタッチだ」

「……………チェンジで」

「俺だけ遺していくなんて、クラスメイトとして薄情だとおもわな
いか？」

即刻踵を返す木下。しかし竜希は放さない。やっと掴んだ希望の芽、放してはならない。

「やめてアタシをそつちに巻き込まないで!？」

「嫌だ俺だって被害者だ! 見捨てないでくれ!」

「お、お前等俺を無視すんじゃ」

「黙りなさい変態! 深間君早く扉を閉めて!!」

バンツ!! と大きく耳に来る音を立てながら扉は閉められた。
後に残ったのは息が切れている竜希と木下のみ、

ガラツ「お前等俺を変態扱いすん」

バンツ!!

「.....」

のみだった。変態? そんなものは最初からいません。二人の背中がそう語っていた。

後にこの光景を見ていたクラスメイトAはこう語る。

『私、騒ぎのあった扉の一番近くの席にいたんですけど、怒鳴り声があると思ったら妖怪がいたんです。新人類やニューカマーなんてそんなチャチなものじゃありません。もっと恐ろしいものの片鱗を垣間見てしまいました……。あれ以来、テレビのニューハーフタレントを素直に見ることが出来ないんです……。深間君と木下さんが退治してくれて、本当に助かりました』

と、二人に感謝の意を述べたという。

更に同級生Tはこう語る。

『私はたまたま廊下を歩いていただけ、あんなおぞましいもの見たことがなかったわ。女装を馬鹿にするなんて許される事じゃないわ！ 女装は学園のアイドルの吉井く アキちゃんだけに許された名誉ある所業なのよ！！』

このアキちゃんが誰なのか、それは語られるべきことではない、のかもしれない。

「……………俺、本当に他人がわからなくなってきたよりユウキ……………」

『……………ああ。流石のオレも、あれにはドン引きだったぜ』

シヨックから一日、ようやく精神が回復してきた俺は、否俺達は再び、学校のトイレで会話をしていた。もちろん、話の肴は昨日のBクラス代表という名の変態だ。

「しかも聞いた話だと、あの格好で写真会まで開いたらしいんだぜ……………なんなんだよこの学校呪われてんのかよ……………」

『……………まあオカルト要素が入ってるくらいだしなあ……………』

鏡の中にいるオレは、呼称リュウキ。名前はコイツが決めた。

「……………そろそろ、HRの時間だから戻るか。じゃあなリュウキ。洗面台を汚さずに済んで良かったよ」

『ああ……。まあ、話に乗るくらいなら出来るから、あんま詰め込
むなよ?』

最早相談に乗ってくれる近所のお友達な関係になりつつあるリュ
ウキに礼を言い、髪型を戻す。それ同時に、リュウキの姿も消えて
いく。

……さて、今日も一日頑張るか。

第八話 モザイク必須（後書き）

一人目はモブ。二人目はDクラスよりゲスト登場でした。

第九話 交渉（前書き）

Fクラス登場。

第九話 交渉

教室に戻った竜希を待っていたのは、見慣れていた面々だった。

「Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

そう言ったのはFクラス代表の坂本雄二。

ちなみに今回来ているFクラスの面々は代表坂本雄二を筆頭に、学園代表バカ吉井明久、木下優子の弟木下秀吉、カメラを携えた小柄な男士屋康太、そして不慮の出来事で無得点扱いとなりFクラスに配属された姫路瑞希である。

「うーん……何が目的なの？」

当然木下はその様子に訝しむ。負けるとは露程も思っていないだろうが、万が一にでも負けた場合Fクラスの設備になる。それだけはどうしても避けたい。

「もちろん、俺達Fクラスの勝利だ」

口角を吊り上げて宣言する坂本。

だが木下はその様子に、更に警戒する。

学年最下層であるFクラスが、最高位のAクラスに挑む事自体珍しい。当然、何か裏がると睨む。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらす事が出来るのはありがたいけどね、だからといってわざわざリスクを犯す必要も無いかな」

「賢明だな」

戦争を断ろうとする木下に対して、坂本は待っていたといわんばかりに口を開く。

「ところで、Cクラスとの戦争はどうだった？」

「ああ。昨日の？」

今まで忘れていた、と言わんばかりに思い出した木下。

「時間はとられたけど、それだけね。私と久保君、深間君と美穂、佐藤さんだけで楽勝だったわ」

「深間？」

今まで自分のペースで事を進めていた坂本が、初めて疑問の声を上げた。

「呼んだか？」

当然事のあらかたを聞いていた竜希は、呼ばれたことで反応した。しかし、竜希の登場で、

「ふ、深間君！？ 何でAクラスに!？」

「お、お主ここのクラスじゃったのか!？」

「……………予想外」

Fクラスの面々は、二人を除き狼狽えた。

「……チツ。竜希、お前もAクラスだったのか」

「ああ。久しぶりだな雄二」

端から見ても失敗したと顔に書いてある雄二に対して、あくまでも微笑を崩さない竜希。取り残された姫路は困惑していた。

「あ、あの坂本君？ この人は一体？」

「ああ。悪い、教室で説明してなかったな」

雄二が紹介しようとするよりも早く、竜希が一步前に出て自己紹介した。

「こんにちはは姫路さん。Aクラス所属の深間竜希。雄二とは幼馴染をさせてもらっているよ」

第九話 交渉（後書き）

まさかの幼馴染二人目。

第十話 思惑（前書き）

交渉成立。

第十話 思惑

「……BクラスとDクラスとは、和平交渉にて終戦、か」

竜希の登場によつてすっかり調子を乱されたFクラス組は、元々あつた作戦をそのまま実行していた。

即ち、『和平交渉にて終結したニクラスから攻め込まれたく無かつたら、大人しくこつちの条件飲めやコラ作戦』別名脅迫おねがいである。

余談だがこの対談、Aクラスの設備をフルに活用し、各人それぞれにお茶が出されている状態でテーブルにつき進められている。お茶汲みは竜希が進んでした。

「……で、そつちの考えはどうなんだ？」

出されたコーラに手をつけず、あくまでもこちらには余裕があるという体を貫く雄二。その様子を見ている竜希は、木下にあることを相談した。

「なあ木下。この提案受けないか？」

「うーん……でもそこまでリスクのあるのは……」

「あの変態と戦いたくないんだが」

「代表が負けるなんてありえないしね、その提案受けるよ」

あの変態とはやりたくない。

二人の心が繋がった瞬間だった。

「じゃあ開始は」

「でもこちらからも提案」

話も済んだと思い開始時刻を話そうとする雄二を遮り、木下は要求を言った。

「代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうね、お互い五人ずつ選抜しての勝ち抜き戦っていうのはどう？ 一騎打ち五回で先に三回勝った方が勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う……」

上手くいったと思ったのだろう。吉井が苦悶の声を上げた。

「なるほど。こちらから姫路が出てくることを警戒しているのか」

「そついうこと」

姫路瑞希の成績は一年の学年末時で学年二位。学年でAクラス代表である霧島翔子に次いで高いのである。

「霧島代表の勝利は疑われない。けど、その時の調子によっては、実力を出し切れないこともあるかもしれないしな」

二人の実力は僅かに霧島翔子が勝っているとはいえ拮抗している。竜希の言う通り、実力を出し切れずに姫路瑞希が絶対調だったならば、万が一ということはあるかもしれない。

その様子に面白くないといった顔をする吉井だったが、確かにそれほどの差はあるだろう、と考えすぐに気持ちを切り替えた。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「信用したいけど、こっちもAクラスとしての沽券があるんだ」

勝てば英雄、負ければ戦犯の戦争において、軽はずみな承諾はできない。竜希の言葉を聞き、雄二は折れた。

「……わかった。そっちの条件を飲もう」

「本当？ 嬉しいな」

「但し勝負内容はこちらで決めさせてもらおう。それくらいのハンデがあってもいいだろう？」

「え？ うーん……」

木下が喜んだのも束の間。確かに雄二は折れたが、ただでは折れなかった。少しでも有利になるようにと、策を練っていくのは流石といえよう。

竜希と木下が悩んでいたところ、意外なところから決着はつけられた。

「……雄二の提案、受けても良い」

「うわっ」

吉井の後ろから、たった今戻ってきたらしい霧島が立っており、決断を下した。

突然発せられた凜とした声に、吉井が驚いた。

「へえ……？ いいのか代表？」

竜希が真意を汲みかねていると、霧島はさらに言う。

「……その代わりに、条件がある」

「条件、だと？」

「……科目の選択権はFクラスが三つ、Aクラスが二つ」

先程の雄二の案をさらに曲げ、妥協案を提示する。

「まあ妥当だな」

「……そして負けた方はなんでも一つ、言う事を聞く」

霧島は雄二の顔を真っ直ぐに見つめ、そう言い放った。

「……………！！（カチャカチャカチャ）」

「ムツツリーニまだ早いよ！ っていうか負ける気満々じゃないか
！」

霧島の条件を聞いたバカ二人は、いらぬ心配と余計な妄想を膨らましていた。

第十話 思惑（後書き）

バカ二人は放って置くべし。

第十一話 戦前準備（前書き）

Aクラスで作戦会議。

第十一話 戦前準備

交渉成立だ、と言い残し雄二は去っていった。残されたAクラスの面々はクラス中の生徒を集め、この後に行われる戦争に対する作戦会議を始めた。議長進行はなぜか竜希、板書もといモニター操作は久保である。

「あー、知っている者もいると思うが、我々Aクラスはこの後の午前十時より、Fクラスと試召戦争行う事となった」

サワ……ザワ……と生徒間で騒々しくなる。

「静かに。それで今回の戦争だが、互いのクラス代表の交渉により、一人対一人の一騎打ちを計五回の勝ち抜き戦となった」

再びザワ……ザワ……と騒々しくなる。

「ハイ静かに。それでまずはモニターを見てくれ」

モニター操作の久保に合図する竜希。

モニターディスプレイに、Fクラスの六人が映し出される。

「今回の戦争にあたり、Fクラスから選抜されるであろう人物をピックアップしてみた。そして絞られたのが、この六人だ」

並んでいる人物の顔写真を、久保が操作して一枚を拡大する。表示されたのは、Fクラス代表。

「まず確実に出てくるであろう相手は、クラス代表の坂本雄二。こ

の者は、我等が代表霧島に相手をしてもらう」

二人目の写真が拡大される。

「続いて木下秀吉。知つての通り木下優子の弟だ。ピックアップ理由は、二度の戦争で常に善戦に出ており、他の者より召喚獣の操作が慣れているであろう、ということだ」

「深間君。ちょっといいかしら」

木下秀吉の紹介で、姉である木下優子の手が上がった。

「秀吉の相手はアタシがさせてもらうわ」

「勝算は？」

「99パーセント。余程の事が無い限り、絶対に負けないと良い切れるわね」

「ならば任せよう。健闘を祈る」

なんなく二人目の代表者が決まった。木下からは「フッフ……待ってなさい秀吉……」Cクラスのこと、ノシつけて返してあげるわ……」などと呟いているが、誰も突っ込まない。

三人目の写真が映る。

「土屋康太。Fクラスでは寡黙^{ムツクシ}なる性職者と呼ばれている、保健体育の実力者だ。噂ではBクラスの代表を討つたのもこいつだと言われている」

「ハイハイ！　じゃあボクが相手するよ！」

元気な声とともに、工藤が手を上げた。

「工藤か。保健体育に自信は？」

「腕輪持ちだよ！」

と言ってVサインを作る。

腕輪とは、一科目の点数が400点以上の者は、その教科に限り召喚獣に特殊能力が付与されるという証である。腕輪を持っているものはAクラスでも少なく、腕輪持ちはAクラスでも有数の実力者ということになる。

「なら土屋は工藤に相手してもらおう。では次だ」

土屋の隣の写真が拡大される。

「恐らくこの者が最大の障害だ。姫路瑞希、一学年末では次席に置かれていた強者だ。実力は霧島代表と同等とつわもの思ってくれば良い」

『姫路瑞希だっ？』

『去年のテストでも上位一桁にいた奴がどうしてFクラスに？』

『瑞希ちゃんが相手じゃ勝つのは厳しいんじゃない？』

流石に姫路の名は皆聞いたことがあるようで、ネガティブな会話が飛ぶ。しかしその中で、一人の男が手を上げた。

「深間。姫路さんは僕に相手をさせてくれ」

「久保か。どうしてだ？」

「僕にも学年次席としてのプライドがあるんでね」

振り分け試験で体調の優れなかった姫路は途中退席し、試験は無
得点となってしまった。故にその時の結果は無く、久保が学年次席
に座った。その久保が相手をしたという事は、次席としての決着
をつける、ということだろう。

「……確かに霧島代表以外で相手を出来るのはお前くらいか。なら
久保、姫路を任せたまえ」

順調に相手が決まっていき、次の写真が拡大される。

「島田美波。古典や現代国語といった科目はまるでダメだが、数学
や英語はBクラス並の点数を誇る。だが点数にムラが大きいため、
出てくる可能性は薄いだらう」

そして最後に、と付け加え、最後の人物の写真が拡大され映し出
される。

「Fクラスでもバカ扱いされる、学年きつてのバカ、吉井明久。点
数は総合で霧島代表の五分の一にも満たないという酷さだ」

『なんでそいつが出てくるって思うんだ？』

竜希のあまりな紹介に、クラスメイトの一人が質問した。

「良い質問ですねえ」

「深間。某ニュースの人はいいから説明してくれ」

「久保が冷たい……。まあいい。この吉井明久の注意すべき点は点数ではない。”観察処分者”によって培われた操作技術にある」

観察処分者とは。

文月学園において、学業に向上の見られない者、成績が著しく低い者、普段の素行に問題のある者。以上の条件を満たしたものは、文月学園最高責任者より観察処分者に任命される。なお観察処分者の仕事は教師の雑用が主であり、特例として召喚獣を物に触れる事の出来る教師仕様とする。なおこの召喚獣が受けたダメージは召喚主に数割フィードバックされる。

「……以上、文月書房より」

「懇切丁寧な説明ありがとう霧島代表」

「ふ、深間。やっぱり僕は吉井君と」

「落ち着いて話せ久保。息を荒げるな」

何はともあれ。

「……さて、この吉井だが自分の点数の数倍の相手でも互角に渡り合う事が出来るという。そこで吉井の相手をしてもらう者を……」

「ふ、深間！ 僕が！」

「……まだ決ま^らないメンバーから決めてもらいたい」

久保が頂垂れたが知ったこっちゃん無い。

この吉井を誰が相手するか、というところでクラス中で話し声が聞こえるが、決まる様子は無い。さっきからサラサラと決まっていたが、元々これはクラスの命運を掛けた戦争。自分から戦いたいなんていう生徒は先の三人くらいなものである。

「……………はい。じゃあ自分が、もしくは推薦したい人がいる場合は拳手を」

「……………はい」

静かに、しかししっかりと上がる手。伸ばしたのは、霧島翔子。

「……………私は、竜希がいいと思う」

独特な間を空けて言われた名前は、深間竜希だった。

「いや、霧島代表……………。俺は補欠で入ったようなものだし、もっと成績上のやつの方が……………」

「……………出なければ、名前で呼んでもらう」

「……………」

その言葉に黙る竜希。言った本人である霧島は、竜希のその反応にどこか寂しそうにしていた。

困ったように頭をかきながら、意を決したように答えた。

「……………よし。俺が吉井明久、もしくは島田美波の相手、木下は木下秀吉、久保は姫路瑞希、工藤は土屋康太、そして霧島代表はFクラス代表坂本雄二の相手をしてもらう。では皆、彼等の応援をしてくれ！」

第十一話 戦前準備（後書き）

次回、戦争です。

第十二話 一回戦（前書き）

一回戦です。

第十二話 一回戦

「では、両名共準備はよろしいですか？」

出場者も決まり、開戦の時刻となった。

場所は我等がAクラスで、両クラスの生徒全員が入っている。しかしそれでもまだ余裕がある教室を見て、改めてAクラスの優遇振りが伺えられる。

「それでは一人目の方、前へ」

「アタシから行くわ」

Aクラスからは木下が出た。これで相手がこちらの予定通り秀吉を出してくれてくれればいいのだが、問題ないだろう。

「ではワシが行くとするかの」

翁言葉で話す、木下秀吉が木下優子の相手として立ちはだかった。恐らく相手は、弟なんだから集中力の乱し方を知っているだろうとでも思っているだろう。

確かに相手の弱点をつくのは効率的で賢いやり方だ。尤も、

「ところでさ、秀吉」

「む、なんじゃ姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃったかのう」

今回に限っては、悪手だ。

「じゃーいや。その代わりに、こっちにきてくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうする気じゃ姉上？」

木下弟の腕を引っ張って廊下に連れ出す木下。……面倒だ、もう優子と秀吉でいいか。

それにしてもあの二人は本当にそっくりだ。二卵性らしいのだが、実際は一卵性にしか見えない。

『姉上、勝負は どうしてワシの腕を掴むのじゃ？』

『あんだ、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがCクラスの人たちを豚呼ばわりしたことになってるのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測してあ、姉上っ！ ちがっ……！ その間接はそっちには曲がらなっ

……』

ガラガラガラッ

「秀吉、急用で帰るってさ。代わりに人を出してくれる？」

「い、いや……うちの不戦敗でいい……」

にこやかに笑いながら振り返り血を拭う優子。確かに、これは顔が引きつってしまふ光景だ。

「木下。首元にも付いてるぞ」

「あら本当。ありがとう深間君。全く秀吉ったら、ちょっと血が出たくらいで大袈裟なんだから」

そのちよつとは、決して『ささくれ弄ったら血が出たよー』や『痛っ！ 針が刺さっちゃった』なレベルではないはずだ。

「そうですか。それはまずAクラスが一勝、と」

ノートパソコンをカタカタと弄り、操作していく高橋女史。その様子に、動揺などの感情の動きは見られず、堅物なイメージすら感じられる。

やがてモニターディスプレイには結果が表示された。

『 Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉
生命活動 W I N VS D E A D 』

案外柔らかい先生なのかもしれない。

第十二話 一回戦（後書き）

秀吉に黙禱。

第十三話 二回戦（前書き）

二回戦です。

第十三話 二回戦

「では次の方どうぞ」

秀吉が猟奇的オブジェとなっているであろうにも関わらず、高橋女史は次の代表者を促した。

「よし、頼んだぞ明久」

「え！？ 僕！？」

吉井が相手らしい。となると、予定通り俺が出るか。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出せって事？」

吉井の口から、意外な言葉が漏れた。

雄二の『信じている』発言。そして吉井の『本気』宣言。この二つから導き出される答えは 油断大敵か。

『おい。実は吉井って凄いやつなのか？』

『いや、そんな話聞いたこと無いが』

『いつものジョークだろ？』

味方であるはずのFクラスから、そんな言葉が飛び交う。

それもそうだろう。去年同じクラスだった俺から言わせてもらっても、吉井の成績は良くない。

「……竜希」

しかし吉井の言葉を真に受けたのか、霧島が俺に話しかけた。

「……油断しないで。絶対に勝って」

「……わかってるよ。負けるつもりはないさ」

直々にエールなんて受けたら、勝たざるをえないじゃないか。俺と吉井が、互いに向かい合う。

そこで俺は、吉井にカマを掛けてみた。

「教科は物理で。吉井、まさかとは思うが……」

「あれ、気付いた？ 御名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

聞いてもいないのに喋りだす吉井。こういうところは、去年からなにも変わっていない。

だが次の言葉で、俺はこいつの認識を改めざるをえなかった。

「能ある鷹は爪を隠すってね。実は僕」

互いの点数が、表示される。

「左利きなんだ」

『Aクラス 深間竜希 VS Fクラス 吉井明久
物理 337点 VS 62点 』

勝負は一瞬でついた。

「……僕の、負けか」

「このバカあ！！ テストに利き腕は関係ないでしょ！！！」

「あがあっ！！ み、美波！ 僕の間接はそつちに曲がらなっ……
！」

あっけなく倒された吉井は、同クラスの島田美波から関節技を極められていた。

だが俺はそんな吉井に、言いたいことがあった。

「……なあ吉井」

「うう……あ、ふ、深間君。どうしたの？」

相変わらずのバカっぽい面構えを見せてくる吉井だが、俺は気にもしない。

「お前……」

「え、何？ もしかして僕が左利きだという衝撃の事実困惑して
」

「お前……『能ある鷹は爪を隠す』なんてことわざ、知ってたんだ

な!！」

「悪意の無い賞賛が胸に痛い痛い痛いっ!！」

どうしたんだろ。急に胸を押さえて転げ回り始めた。

いやしかし、それにしても驚きだ。

去年は古典の問題ではべり形を答えるとき”はんなり”と答える位無知だったというのに、これは凄い進歩だ。

「頑張れよ吉井。物理も六十を越したんだから、次は七十点台にチャレンジだ!！」

「やめて僕をこれ以上惨めにしないでっ!！」

褒めたのに、どうして泣くんだろ。あれか、分けも分からず涙が出るという思春期の精神問題か。難しい年頃だし、ありえそうだな。

一通り言いたいことを言うと、俺はAクラス側に戻った。そこで待っていたのは、代表者の面々。

「…………ご苦労様」

「ああ。御要望通り、勝ってきたよ」

これで二勝。我等Aクラスが、勝利に王手を掛けた。

第十三話 二回戦（後書き）

明久が勝つ？ そんなパターンは用意していない。

第十四話 三回戦（前書き）

三回戦です。ほとんど原作沿い。

第十四話 三回戦

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スッ）」

Fクラス側で静かに立つ寡黙な男。確か、ムツツリーニと呼ばれている保健体育のスペシャリスト、土屋だ。

去年は同じクラスにいたのだが、小柄で地味な印象だったので特に目立つような奴でもなかった。

それにしても、Fクラスには随分知った顔が多い。

雄二はともかく、吉井に土屋、木下秀吉に島田美波、Fクラスのその他大勢にいる須川達もクラスメイトだったはずだ。

「じゃ、ボクが行こうかな？」

そう言っただけで立ち上がったのは工藤。予定していた通り、Fクラスの土屋からは保健体育が選択される。

科目選択権は今のところ俺が使っただけで、後一回Aクラスには残っている。対するFクラスにはこれを含め三回丸ごとある。木下？ あれは不戦勝だから例外だろう。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

軽く挨拶代わりに、挑発をかける工藤。それに対し、土屋は涼しい顔をしている。

「でもボクだつてかなり得意なんだよ？ ……君とは違って、実技で、ね」

『『『………！！（ガタツ）』』』

Fクラスのその他大勢の男子生徒が、全員反応した。もちろん、吉井と土屋も。雄二は反応しなかったが。

興味津々といった顔をしている吉井を見た工藤は、土屋を無視しからかい始めた。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？ もちろん実技で」

「ふっ。望むところ……」

「アキには永遠にそんな機会こないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！ 永久に必要ありません！」

随分と嫌われているようで……。

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが」

女子に永久に必要なと言われた明久は、血涙を流しさめざめと泣いていた。

「そろそろ召喚してください」

いい加減前座が長すぎたようで、高橋女史からお咎めの言葉が出る。

「はい。試獣召喚サモンつと」

「……………試獣召喚サモン」

二人の召喚獣が召喚される。

工藤の召喚獣は、セーラー服に巨大な斧というミスマッチな格好。個人的には機関銃を持ってもらいたかった。

そして対する土屋の召喚獣は、忍装束に日本の小太刀という時代を遡った格好。地味だった土屋には、少々カンに触る格好ではないだろうか。

「理論派と実戦派。どっちが強いを見せてあげるよ」

工藤の召喚獣が、斧に電気を纏わせながら肉薄する。この電気力は腕輪の力で、その証拠に召喚獣の腕輪が光っている。

相対する土屋の召喚獣は微動だにしない。Bクラスの代表を討ち破ったと聞いたのに、この程度だったか。

「バイバイ。ムツツリー二君」

そう言い、巨大な斧を振りかざす工藤の召喚獣。このままいけば、相手の召喚獣は真つ二つとなり勝負が決するだろう。

しかしそうは問屋が卸さない。油断大敵とはよくいったもので、土屋が僅かに呟いた。

「……………加速ボーン」

瞬間、斧が振り下ろされた場所には召喚獣がおらず、斧は空振りする。そして、その後ろには土屋の召喚獣が小太刀を振り切った格好で立っており。

「……………加速、終了」

その言葉と同時に、工藤の召喚獣が鮮血を噴出した。やがて、遅れて点数が表示される。

▣ Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太
保健体育 446点 VS 572点
▣

互いに互いが圧倒的な点数だったにも関わらず、土屋の点数は工藤を大きく上回っていた。

「そ、そんな……………！ この、ボクが……………！」

あれだけ豪語していたのだから、誰にも負けない自信があったのだろう。ガツクリと肩を落とす工藤を、木下が優しく慰めた。

「元気出さない愛子。たまには負ける事だってあるわ」

「……………うん。でも、折角勝てそうだったのに……………」

「後二回もあるのよ。気に病む必要はないわ」

そう。残るは後二回。ただ、俺には一抹の不安があった。

今のところ予想通りにメンバーが出ているが、もしこの後もその通りだとするならば次に出てくるのは姫路瑞希。

それに対抗するのは現学年次席の久保。二人は元と現次席の実力を持ち、その点数も拮抗していると考えていいだろう。

そして点数差がないということは、必然的に操作技術によって結果は左右される。

二度の戦争を経験した姫路瑞希に対し、こちらの久保は一度しか
経験していない。この差が、どう出てくるか……。

第十四話 三回戦（後書き）

まるつきり原作と一緒な展開。

第十五話 副将戦（前書き）

ようやく四回戦です。

第十五話 副将戦

「これで二対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

予想通り、Fクラスからは姫路瑞希が出てきた。そして必然として、こちらからも対戦相手が出る。

「頼んだぞ久保」

「ああ。現学年次席として、きっと勝ってくる」

互いが相對し、にらみ合う。

「科目はどうしますか？」

高橋女史が、二人に声をかける。

「総合科目でお願いします」

「ちょっと待った！ 何を勝手に」

「構いません」

「姫路さん？」

総合科目に指定した久保に、吉井がクレームをつけようとするが

姫路によって止められた。

恐らく久保の苦手科目を選択し、確実に勝とうとも思ったのだろう。しかし吉井、科目選択権はまだ残っているのだから、この選択に勝手もないことはわかっているのだろうか？ ……いや、わかっていないだろうな。バカだし。

「「^{サモン}試獣召喚」」

二人が召喚獣を呼び出し 勝負は一瞬でついた。

『Aクラス 久保利光 VS Fクラス 姫路瑞希
総合科目 3997点 VS 4409点 』

『マ、マジかつ!?!』

『いつの間にこんなに実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

Aクラス、Fクラスから驚きの声上がる。かく言う俺も、正直に驚いている。

去年の成績を見ると、霧島には四百点以上の差があったはず。それが、この数ヶ月の間にここまで伸びたということか。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」

久保が悔しそうに問いかける。元々実力差が二十点と無かったのに、ここまで圧倒的な差をつけられたんだ。悔しくもなるだろう。

「……私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一所懸命なみんなのいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

姫路の口から紡がれた、Fクラスに対する想い。この想いの差が、Fクラスに勝利の希望を与えたというわけか。

「これで二対二です」

今まで冷静にしてきた高橋女史の顔に、僅かな変化が見られた。流石にFクラスがここまで対抗してくるとは思っていなかったのか、声にも若干の焦りが窺える。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは二学年最高成績保持者、霧島翔子。そして。

「俺の番だな」

Fクラスからは彼女の幼馴染、坂本雄二。

奇しくもこの勝負は、俺の幼馴染同士による戦いとなった。

「教科はどうしますか？」

この問いに、雄二が予め決まっていたのか淀みなく答えた。

「教科は日本史。内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！！」

第十五話 副将戦（後書き）

ついに次回決着？

第十六話 大将戦……前（前書き）

決着なりませんでした。

第十六話 大将戦……前

ザワ……ザワ……。

雄二の発言で、Aクラス側でざわめきが起こった。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『集中力と注意力の勝負になるぞ……！』

恐らく、これがFクラスの勝利の鍵。小学生レベルで、霧島が分からない問題があるからこそ宣言してきた勝負。幼馴染である雄二は、恐らく霧島の間違える問題を知っているだろう。

「わかりました。それでは問題を用意しなければなりませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じ、教室を出る高橋女史。教育熱心な先生だから、必要はなくても小学生レベルの資料も持っているのだろう。Fクラスではこれから勝負に出る雄二に、激励の言葉をかけている。

そしてAクラスでもまた、勝負に挑む霧島に全員がエールを送っていた。

「代表なら楽勝だけど、油断しないでね」

「リラックスだよ代表。ちゃちゃっと決めちゃってよー！」

色んな人からのエールを受け、それに一つ一つ応えていく霧島。その様子からは、霧島のカリスマの高さが窺える。

そんな中、俺はただ考えていた。雄二が、なぜあそこまで自信たっぷりなのか、その訳を。

（小学生の頃、あいつは神童だと言われていたのは知ってる。その神童まっさかりの時のあいつは自分が正しいと思いつ込んでいたし、それが正解だと疑わなかった。つまり、その時霧島に教えた中で、何かが間違っていた……。なら何だ？ 何を教えたんだ？）

小学校の頃は雄二の方が霧島よりも頭が良かった。勉強を教えた可能性は十分ある。

だがそれでなにを教えたかまでは分からない。

（小学生……日本史……となると複雑な問題はでない。出るのは人物……年号……時代……。おそらくこの辺りだろうが……）

「……竜希」

考えても答えの出ない思考に悩んでいると、霧島が声を掛けてきた。見れば、雄二も教室を出ようとするところだった。

どうやらいつの間にか時間が経っていたようで、これから対決のようだ。

「どうしたんだ、霧島」

「……………」

そう答えると、何故か霧島は俯いた。見ていた数人の生徒はその様子に首をかしげた。

……まあ、理由は大体わかる。

「……まだ、名前で呼んでくれないの？」

「……………」

今度は、俺が黙る番だった。

霧島の俯く理由、それは名前。

「……小学校の頃は、名前で呼んでくれた」

「……………」

三人でいつもいた時期。その時俺は霧島のことを”翔子”と呼んでいた。だが、あれ以来呼ぶことをやめた。

「……どうして？」

「……………時間だ。早く行け」

突き返すように、霧島に行く事を促す。だが、霧島は俺の目を見たまま動かない。

やがて無駄と悟ったか否かは分からないが、霧島は俺に提案した。

「……約束して」

「……なにをだ？」

「……私は絶対勝ってくる。だから……………」

「……………」

「……勝つたら、昔のように呼んで。たっくん」

第十六話 大将戦……前（後書き）

三人の馴れ初めはいずれ出します。

第十七話 大将戦（前書き）

大将戦中のAクラス。

第十七話 大将戦

Side: 明久

『では問題を配ります。制限時間は五十分。満点は百点です』

画面の向こうでは、日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置いた。

Aクラスの巨大モニターに映し出されているのは視聴覚室の様子。対戦する二人は特別にセットされた机に座り開始の時を待っている。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『分かっているぞ』

『では、始めてください』

二人の手によって、問題用紙が表にされる。

両クラスが固唾を呑んで見守る中、僕の隣では深間君が沈鬱な表情で画面を見ていた。

「……ねえ深間君」

「ん？」

「さつき霧島さんとなにか話していたみたいだけど、何かあったの？」

『『『………！！（ギラッ）』』』

しまった。女子と話していたなんて事実を聞いたら、FFF団が黙っているはずがなかった！

FFF団。別称『他人の悪行を許さない、乙女の純情を守る紳士の団』だ（会長談）。

周りの殺気にも動じないのか、深間君はおもむろに手を僕の方に向けて。

「………ひりりゃ」

「みよへっ？」

僕のほっぺたをつまみ、左右に伸ばし始めたって痛たたたたっ！？ み、美波に喰らう関節技とは別の感覚の痛みがっ！？

「おーまーえーは………どーしてそう無神経なのかなあ？」

「ひ、ひひゃいつ！？ ひひゃいよふははふん！！」

「痛いよ深間君」と言いたいけど、口が上手く回らない。というより離して！？

「深間君落ち着いて。それにその話、ボクも聞きたいな」

「工藤。お前のほっぺたもよく伸びそうだな」

「あはは……え、遠慮させて貰うよ」

思わぬところから助け舟が来た。工藤さん！ もっと押して！

「余計な詮索はしない方が、長生きできるぞ？」

「そうしたいのは山々なんだけどね……代表、なんだか落ち込んでたからね」

「……」

工藤さんの言葉に深間君の手が止まる。って伸ばしたまま固まらないんで！？

「それだけが気になっちゃってね。で、どうしてなのかな？」

「……」

あ、ようやく手が緩んだ。この隙について脱出できない！？

「うりゃ」

「ふみみみみみみみ……」

また引っ張り始めた。今度は弱くだけど。

「……別に話す事でもないしな」

「ふうん……？ まあいいや。気が向いたら教えてね」

それだけ言うと工藤さんはまたモニターに目を向けた。あとそろそろ離してほしい。若干痛覚が消えかけてきた。

「……………ところで吉井」

「ふへ？」

「雄二、自信あるようだけど、なんか秘策でもあるのか？」

「どうしよう。これはFクラスが勝利するための作戦で秘密事項だ。でももう対決は始まっているし、今更知られても別に困らないかな？ ……うん。どうせ対決が終われば霧島さんには雄二の作戦が分かるだろうし、なにより今知られても霧島さんに伝える手段は無い。そんなことをしたら、即失格だ。問題ないよね。でもその前に……………」

「ふえ、ふえを。ふえを……………」

「ふえ？ ……ああ、手か」

ふづ。ようやく離してくれた。

「いてて……………。あのね、雄二は霧島さんが絶対に間違える問題があるから、日本史を選んだんだって」

「間違える？ なにを？」

深間君はわからないように首を傾げている。ふふんそうだろうね。なんせこの僕でもド忘れしてしまうような問題だ。いくら深間君で

も、分からない問題くらいあるよね。

仕方ない。無知な深間君に分かるように教えてあげるとするか。

「その問題はね 『大化の改新』さ」

「西暦645年に起きた、中大兄皇子と中臣鎌足が蘇我氏を討って行った政策か？」

やめてそんな意外そうな目で見ないでっ！ 僕に向けられているわけじゃないって分かっているのに涙が出る！

「……そうか。霧島は昔雄二から……だからあそこまで自信がいやでも」

深間君がブツブツ言っているようだけど僕の耳には入らない。くそ、流石はAクラスだ。僕の分からない問題を補足までつけて答えてくるなんて！

「あ……」

今までモニターに釘付けだった姫路さんの口から、驚きの声が零れた。

どうしたんだろう。まさか問題が出ずに終わったりしたのだろうか。

《次の()の中に、正しい年号を入れなさい》

() 年 平城京に遷都

() 年 平安京に遷都

ディスプレイには、僕でも分かりそうな小学生の問題が並んでいる。

そのまま視線を下にスライドさせていく。

() 年 応仁の乱勃発

() 年 鎌倉幕府成立

() 年 大化の改新

出ていた。

「よ、吉井くんっ」

「うん」

「これで、私達っ……」

「うん！ これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

揃ったFクラスみんなの言葉。

「最下層に位置した僕らの、歴史的勝利だ！」

『うおおおおっ！！』

教室を揺るがすような大歓声が起き、

「なあ吉井。雄二って」

僕に問いかける深間君の疑問をBGMに、

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

「雄二って、満点取れるのか？」

直前に聞いたその言葉が、僕等の耳には強く響いた。

第十七話 大将戦（後書き）

勉強しなきゃ取れるモンも取れるわけないですね。

第十八話 いつかは（前書き）

これにて第一章終結。

第十八話 いつかは

「三対二で、Aクラスの勝利です」

視聴覚室にFクラス全員がなだれ込んだため、それに便乗してAクラスも入っていった。そして、先程の言葉が宣告された。

「……雄二。私の勝ち」

敗者である雄二は床に正座し、ただ一言呟いた。

「……………殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる。歯を食いしばれっ！」

「吉井君落ち着いてください！」

雄二の覚悟に飛びかかろうとする吉井だが、後ろから抱き付いてきた姫路によってそれは成されなかった。

「大体53点ってなんだよ！ 0点なら名前の書き忘れとか考えられるけどこれじゃまるで」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！ あんたなら30点も取れないでしょうがっ！」

「それについては否定しない！」

「それなら坂本君を責めちゃダメですっ！」

「というか、小学生の内容で30点いかないのか……」

俺の最後の呟きは、吉井を中心とした騒ぎに掻き消された。

なにやら吉井が「喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」とか言っている気がするが気のせいだろう。仮に本当だとしても、それは体罰ではなく拷問だと後で教えて遣らねば、これからの高校生活で苦勞する事になるかも知れない。

何はともあれ、決着は着いた。これ以上ここに居る意味も薄いだろう。戦後処理や色々は、明日に久保か誰かにでも聞けばいいだろう。

「おや、帰るのかい深間」

「ああ。後のことは、明日にでも教えてくれ」

近くにいた久保に一言言い残し、雑踏の中へと入りAクラスを指す。

雄二に見つかって、Aクラスにいることを問い詰められるのは面倒くさい。何より、霧島に問答無用に言いつけられた約束が俺の足をより一層速めた。

霧島翔子は坂本雄二と一緒に歩いていた。これは戦争が終わった後、翔子の発した一言が原因である。

『……これから、デートに行く』

もちろん敗者である雄二に拒否権など存在せず、翔子に引つ張られて一緒に商店街まで来る羽目となった。

「しかし良かったのか翔子。約束の『何でも言う事を一つ聞く』っての、こんなことに使って」

「……うん」

このデートは先程の戦争で約束していた事項の一つ、一つ命令を聞くことにより発生したものだ。雄二は翔子の性格から”付き合っ”とばかり言われると思ったので、拍子抜けしていたところを無理矢理連れられてきた、というのが真相だ。

「……竜希、いなかった」

「ああ、そういやそうだったな」

アイツに聞きたいことあったのに、と愚痴を零す雄二だが、隣を歩く翔子は影の差す表情をしていた。

『……勝つたら、昔のように呼んで』

竜希がいなくなったのは、自分があんなことを言ったからだろうか、と翔子は不安になっていた。

誰にも触れられたくないことの二つや三つある。彼にとって、ま

さにそれだったのだろう。しかし。

(……呼ぶの、そんなに嫌だった?)

昔のように呼んでくれなくなつてから、大分久しい。互いに成長し、精神も成熟してきた。今更名前で呼び合うのも気恥ずかしいと感じるならそれも分かる。しかし、竜希の場合はそんな様子ではなかった。

「翔子？」

「……なに？」

「どうしたんだ？ 随分難しい顔してたが」

そんな顔をしていたのだろうか、と翔子は思った。

どうやら考え事をしているうちに、知らず知らず表情を変えていたようだ。隣を歩く幼馴染に心配されるほどに。

「まあなんにせよ、俺には関係ないか」

雄二の言葉に、翔子が立ち止まった。

急に停止した翔子に気がついた雄二は、声をかけた。

「翔子？」

「……雄二は」

「あん？」

「……雄二は、竜希のことどう思ってるの？」

それは純粹な疑問。雄二はその問に、つまりながらも答えた。

「どつって、そりゃ……幼馴染の友達、くらいだな……」

「……私は」

雄二の答えを聞き、翔子もまた自身の想いをぶつけた。

「……私は、それだけと思えない」

「……」

「……私にとって、竜希はただの幼馴染じゃない。もちろん、雄二もそう」

「……だから、今のままの関係は嫌。昔のような関係に、戻りたい」

「……そうか」

「……うん」

そこまで吐露すると、翔子は再び黙った。その頭に乗せられる、無骨な手。

顔を上げて見てみれば、雄二がはにかみながら自分を見下ろしていた。

「意外だな。今の話も、さっきの命令も」

「……そう?」

「俺はてつきり”付き合え”って言われるかと思って内心冷や汗も
のだったんだがな」

「……竜希との関係が戻るまでは、そういうことはしない」

「そうか。そりゃ悪かったな」

雄二の物言いに若干膨れっ面になる翔子だったが、気を取り直す
かのように元の表情に戻った。

「……だから、戻るように頑張る。雄二にも、応援して貰いたい」

「俺としても仲良くなるのは大歓迎だしな」

「……それで、元の関係に戻ったら付き合っただけ欲しい」

「ちょっと待て。色々おかしいぞ」

最後の言葉が容認できず、雄二が思わず待ったをかける。

「……どこが?」

「お前は言った事に疑問を覚えないのか!? なんでアイツと仲直
りしたら俺と付き合うことになるんだよ!」

「……私の旦那は、雄二しかない」

「竜希はどうした!? あいつだって立場的には俺と同じだろ!」

「……竜希のことはまだわからない。仲も戻らないし……」

「ああうん分かった。だったらその後考えればいいじゃねえか！
何も今すぐ決めなきゃいけねえんじゃないんだからよ！」

「……あ、そっか」

「お前はどこか抜けてるよな……」

天然気質な幼馴染を横目に、雄二は並んで歩いていった。辺りはすっかり夕方で、赫いアスファルトには二人の影が重なっていた。

「……明日、竜希と話をしてみる」

「ああ、それがいいだろうな」

「……その後、交際を申し込む」

「だから早いっつってんだろっか！」

仲が戻っても苦勞するのは俺か、と雄二は心の中で呟いた。

第十八話 いつかは（後書き）

ここでの雄二は原作よりちょっとだけ恵まれます。

そしてこれでストックは一度切れます。

次回がいつになるか分かりませんが、待っていてくださる方がいれば早く執筆すると思います。

ではまたこの場で会う日まで。

主人公紹介（前書き）

主人公解説。後になるにつれて増えていくかと。

主人公紹介

名前：深間竜希ふかまたつき

所属：文月学園二年A組

格好

髪：黒で伸び放題。前髪が額を隠す程度に伸びており肩まである。

背：170cm程度。大体明久くらい。

顔：額に一文字の傷がある。女装には向かない顔つき。

点数

現代国語：300点近く。

現代社会：不明

保健体育：不明

日本史：不明

世界史：不明

英語：不明

数学：不明

物理：350点弱。

化学：不明

古典：不明

総合教科：Aクラスにいることから3000はあるかと。

家族構成：不明

その他：雄二・翔子と幼馴染。額の傷は幼馴染二人と関係が？

以降逐次追記。

主人公紹介（後書き）

更新されるのはいつになるんでしょうね。私にもわかりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9636r/>

バカとテストと召喚獣 現に見る白昼夢

2011年7月2日16時12分発行